九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

長い11世紀のイングランド : 北西ヨーロッパ海域におけるその構造と位置c. 960～1135年

鶴島, 博和

https://hdl.handle.net/2324/6787694

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：鶴島　博和

論 文 名　：長い 11 世紀のイングランド：北西ヨーロッパ海域におけるその構造と位置 c. 960～1135 年

区　　分　：乙

論　文　内　容　の　要　旨

本論の目的は、ヨーロッパにおける半周辺的な政治体として長い 11 世紀に北西ヨーロッパ海域という舞台で誕生した「イングランドの構造」を可能な限り史料に基づいて描くことにある。そのために、本論は以下のような三部構成をとった。

第一部の「権威と権力」は、長い 11 世紀にキリスト教理念によって成立した統合王権のイデオロギー（第一章）とその権力基盤（第二章）を扱った。この時期に、部族制を止揚して「イングランド人」という後にネイションに繋がる民衆団とそれを束ねる国王が誕生した。その象徴的な事件が 973 年のフランク的式次第によるエドガ王の戴冠式である。そのことは、ヨーロッパ世界での公式の国王が誕生したことも意味した。以後、王国において、血統、前王の指名、民衆団の支持といった王位継承の準則が相互規定的に確立していった。しかし、いずれの形をとるにしろ、王冠、刀・王笏、宝珠が表現する王位の戴冠式はヨーロッパ世界における国王権力の正当性を保証したのである。

第二部は、イングランド王国をヨーロッパ世界の中でフランク的な中核地帯に対する半周辺として特徴的に位置付けていった、宮廷（中央）と地域の関係を扱った。ウェスト・サクソン王が、マーシアやノーサンブリアといった大部族王国を統合する中で生まれたイングランド人の王の宮廷は、その経緯もあって、旧ウェスト・サクソン王の本領地域であるテムズ川流域とその南側を巡回し、王領地から食物地代や、成立しつつあった地域組織である州から軍役などの公共負担やゲルドといった税を徴収し、その代わりに貴族や地域社会の財産の保証と紛争解決の「始まり」を提供した。州は、国王家政の需要を満たし、国王命令に応える限り発現する「地域のよき人々」のアモルファスな人的結合組織であった。この統合王権はその子エセルレッドの時期に安定するが、それは北西ヨーロッパに展開していた私たちが「ヴァイキング」とよぶ広域的な政治的海民集団が、国家的商業的拡大を開始した時期と一致する。彼らの拡大はキリスト教徒となった「ヴァイキング」の首長クヌートによるイングランド王の登極に帰結した。キリスト教的原理による王国は、原則的にはキリスト教徒であり臣民の同意があり戴冠式

を行えば異邦人にも王位を提供したのである。クヌートは北西ヨーロッパ海域全域に巨大な政治的統合体を作り上げた（第三章）。

しかし、この王国は 1066 年におこったノルマンディ公ウィリアムによる所謂ノルマン征服によって政治的軸を東西から南北へと転換していった。そして大陸から入植した貴族・騎士たちがイングランド各地に分散して所領を獲得することで、かろうじて残っていたウェセックス、マーシア、ノーサンブリアという部族制度の残滓は、地理的社会的差異は残るものの最終的に消滅した。その意味では、この時イングランドは初めて統合されたのである。入植した貴族・騎士たちは、在地の先住イングランド人とともに、ヘンリ一世の末年である 1035 年頃までには、その対立と政治的・宗教的融合の連鎖によって新しいイングランド人を形成していった。そして、ヘンリ一世の死後の王位継承は大陸を巻き込む内乱を惹起し、新しいイングランド人は、北西ヨーロッパ海域からヨーロッパ大陸にその政治的な活動場面を拡大していった。

しかし、ノルマン征服による王権と地域の関係の変化は、従来言われてきたほど大きくはなかった。それでも、以後イングランド王の政治的動向は大陸とくにフランス王権との関係に規定されていくことになった点は重要である。そして、1086 年に行われたいわゆるドゥームズデイ審問とその記録である『ドゥームズデイ・ブック』の審問記憶の文字化（記録）は、最終的に州の呼称とその空間構成を固定化し、その制度を可視化したのである。同時に国王と直属封臣、陪臣の名前が記録されたことは、一般臣民関係のみならず、個別の保護＝被保護関係も浮き彫りにした。イングランドの研究史ではこれまで長らく封建制を中心に後者への関心が主として注がれてきたが、ノルマン征服の意義は全体的な構造の中で議論しなくてはならないのである（第四章）。

いずれにせよ、こうして確立した「構造」が、徐々に、とくに 13 世紀以降領域的、行政的統治組織へと変化していくことになる。その「構造」変化の動因は複雑だが、第三部では長い 11 世紀のイングランドに構造的特殊性を与えた「地域のよき人々」＝ジェントリたちの生業の一つである塩業（第五章）と漁業（第六章）、そしてその産業化とそれに伴う、交通体系を背景においたフローネットワーク（第五章・六章・七章）、そして貨幣システムと通貨（第七章）に焦点をあてて動因の一つを解明しようとした。とくに、暦＝「時空間の関係性」から構造に動態を与えた緒力を検討した。例えば海浜地域の製塩は 6 月に始まり 9 月末に終わる。その塩を防腐剤として初期的な産業であるニシン漁とそれに伴う付帯的産業がイースト・アングリアのヤーマスの市を中心に 9 月末から開始され、モノ、人、情報が流れ、それに伴い人々の関係、すなわち構造が少しずつ動き始めたのである。

こうした「流れ」は、空間差と時間差を伴いながら徐々に「構造」に変化を与えたのである。こうして、長い 11 世紀に生まれた「構造」は、変化し、人々の人間、同胞、自然に対する認識の変化と共に、13 世紀以降、次の構造（＝行政的領域国家）が出現した（終章）。